

エッセイ入門

本学公開講座の講義ノートから

境 邦 夫

広島文教女子大学では、地域の社会人の方々に本学教員の日ごろの研究成果を知っていただき、学問芸術の奥深さ、面白さの一端を味わっていただければとの願いから毎年、さまざまなジャンルの公開講座を開催している。その一つとして平成一四年秋、五回にわたって「エッセイ入門」が開催された。うれしいことに最近のエッセイブームを反映してか、定員を超える多くの方々が受講してくださり、皆さんとご一緒に和やかに楽しい時間を持つことができた。講義担当の筆者としても多くのことを勉強させていただいた。以下、そのときの講義ノートをもとにエッセイ鑑賞法や書き方についての小論をまとめた。

ブーム現象とその背景

このところエッセイが静かなブームを呼んでいる。書店にはエッセイコーナーが設けられ人気エッセイストの作品が数多く並んでいる。エッセイストという肩書も以前は作家、評論家などと比べ耳慣れぬ響きがあったが、今は市民権を得てすっかり定着した。また単行本として出版されたエッセイ、古典的エッセイとを問わず、文庫化されるものも多い。毎年、優れた作品に授与される日本エッセイストクラブ賞も最近は大きく報道される。

ブームの背景は何か。いまやわが国は成熟社会となり、不況下とはい

エッセイ入門

え昔とは比較にならない豊かな生活の中で、人々は自分の生き方や人生を見詰めたおそうとしていた。生き方や人生を考えるのに役立つのは何もエッセイだけとは限らない。しかし鑑賞するにしても自ら筆を執って書くにしても小説や、詩などに比べ気軽に取り組める。

現代は小説などのフィクションよりもルポルタージュなどのノンフィクションが注目される。二十世紀となり世界はますます複雑化し激しく変化している。そうした状況を考察し伝えるにはノンフィクションのほうが適している。優れたノンフィクションが生まれるのは逆に小説などのフィクションが衰弱しているといわれるのは、そうした変化に創作活動がついてゆけないからであろう。このような文脈で捉えればノンフィクションを含む広義のエッセイが隆盛なのも理解できる。

エッセイとは何か

エッセイの元祖といえば仏のミツシエル・ド・モンテーニュ（一九三〇—一九九二）である。彼は代表作「レ・ゼツセ（随想録）」の巻頭「読者に」の中で「私は、単純な、自然の、平常の、気取りや技巧のない自分を見てもらいたい。というのは私が描く対象は、私自身だからだ。（略）。私の欠点や生まれながらの姿があるままに描かれているはずだ。読者よ、私自身が、私の書物の題材なのだ」と述べている。「自由な形式で、気軽に自分の意見を述べた散文」——今では当たり前となっているエッセイの定義はモンテーニュによってはじめて唱えられた。現代ではその範疇は幅広く、身辺雑記、回想、写生文、自分史、紀行文、ノンフィクション、ルポなどはいはいる。

エッセイの本質をもう少し立ち入って考察してみよう。エッセイスト玉村豊男氏によるとそれは①小説と違って作り話をしない②ノンフィクション（ルポ）より私的③随筆と比べるとより考察的④面白いものでな

くではならない」となる。そして「面白い」について「単におかしいとか笑えるとかいうことではない。面白い、という言葉は眼の前がパッと明るくなる、白くなるというのが元の意味だそう。見ていた風景が、急にクリアーになり、明快になる。目からウロコが落ちる。エッセイというのは、常にそうした「面白さ」を読者に与えるものでなくては」と物事の捉え方、視点に独自性が必要なことを説く。またエッセイとは「その人でなければ書けないもの」と卓見をのべたのは、評論家の坂西志保氏。捉え方は異なるが、双方ともエッセイの本質を的確に言い当てている。

優れたエッセイの要件

ではもう一步踏み込んで、優れたエッセイの要件について考えてみよう。既述と重複するかもしれないが、まず①読んで面白いこと②文章がよい③内容に一般性、普遍性がある④批判精神がある⑤強い執筆意欲があったこと―等となる。このうち①の「面白い」では玉村氏の指摘する独特なものの方に加え、重要なのはテーマである。どんなテーマであるかによって作品の成否は決定する。②のよい文章の書き方に関しては谷崎潤一郎の名著「文章読本」をはじめ多くの本が出ているが、ここでは現代作家、開高健氏の説を聞こう。ある新聞記者が取材で開高氏の自宅を訪ねたとき彼は「あのなあ、文章は『メリ、ハリ、テリ、ツヤ』の四つや。どれひとつ欠けてもあかん。四つがそろうと名文になる。もつともその前に、何が書いてあるのか、その内容がかんじんやけどなあ。」「ええか、新聞記者のなかにもメリ、ハリまでは合格点を出せるものもある。しかしそのあとのテリ、ツヤと成らそうはおらん。プロのもの書きでもテリ、ツヤを出せるものは少ない。かくいう小生も修行中の身や」といったという。「エッセイの書き方」(岩波書店刊)所載「ど

うしてもかかねばならないものを」早瀬圭一)。鋭敏な感性の持ち主であった、いかにも開高氏らしい、彼にしかいない感覚重視の文章指南である。⑤の強い執筆意欲があること、つまり作者にこの作品をどうしても書きたい、という気持ちが強いことも大切である。この執筆動機の強さが作品にパワーを注入するからである。このことに関しては「エッセイの書き方」のところででもさらに触れたい。

エッセイ鑑賞①

公開講座(鑑賞①)で取り上げたのは、主として作家たちの次のような作品である。

日本エッセイストクラブ編「ベストエッセイ集2001年版」「同2002年版」から「九十一翁の呟き」南條範夫「老いるということ」渡辺淳一 日本文芸家協会編「ベストエッセイ2002 落ち葉の坂道」から「シワの美学」新藤兼人

滋味あふれる作家のエッセイ 「続日本紀行」から「下北風間浦」水上勉 「私 何だか死なないうような気がするんですよ」宇野千代 「人生のこみち」中野孝次 「晩春の旅 山の宿」井伏鱒二

個性あふれる紀行文の名品 「南蛮阿房列車」阿川弘之 「旅は自由席」宮脇俊三 「インド酔夢行」田村隆一 「愛と死への旅」杉本春生 「犬が星見た」武田百合子

食べ物エッセイを書くのは難しい 「食通知ったかぶり」丸谷才一 「食べてびっくり」森須滋郎 「行きつけの店」山口瞳

味わいの深さからいえば、なんといっても水上、宇野両氏の作品である。「風間浦は、青森県下北半島の北端にあつて、下風呂、易国間、蛇浦と三つの字がある。津軽海峡に面した海瀬の寒村だが、ここを好きな

理由は、本島最果ての淋しさを持つているからである」で始まる「下北風間浦」は、水上氏の「飢餓海峡」の舞台となった下北半島を再訪する紀行エッセイである。人間の荒寥を表現するのにもっとも適した舞台としてこの地を選んだと述べているが、エッセイでも氏独特の観察眼が描写する、真冬の、鉛色の空のもとで荒れ狂う海のそばの人影まばらな村々の風景に思いを馳せていると、言い知れぬ寂しさに襲われる。全編淡々とした描写が続くが、話は水上氏と一人の薄幸な女性との交流が軸となつて進み、秀逸な短編小説を読む趣もある。

「私 何だか死なないうながするんですよ」。宇野千代氏のこの風変わりな題のエッセイは、いかにも晩年のこの人らしい淡彩の絵を思わせるような、あるいは幼児の話し言葉のような、何事にもとらわれな純粋無垢な文章が魅力である。白寿を前に健康の秘訣・楽しい生き方が語られるが、華やかで波乱に満ちた人生を送った人が到達する、何かに満たされた、心穏やかな、透き通った境地からにじみ出る一語一語は胸にしみる。

筆者は以前新聞社に勤務していた折、広島でこの両作家にインタビューで個別にお目にかかる機会があった。お二人とも話の間、相手を包み込むような、あたたかい、仏様のような慈愛の眼差しを絶やされなかった。今も忘れられない思い出である。

文は人なり、といわれるとおり文章にはその人の人柄が表れる。そんなことを感じさせるのが南條範夫氏と渡辺淳一氏の作品である。南條氏の「九十一翁の眩き」は、九十一歳になった氏が、老いの心境を淡々と語る。「もういつ死んでもいいと思う。負け惜しみではない。本当のところもう心残りするほどのものは無くなってしまっているのだ」。取り立てて変わったことを述べてはいないが、このような言葉が自然に出てくる人の半生は、よほど充実した素晴らしいものだったのだろう、と読者もほのぼのとしてくる。

渡辺氏の「老いるということ」も同じ「古い」がテーマだが、こちらは氏があちこちの老人ホームを見て回つての感想を交えた報告である。世間の関心の高いテーマであり、教えられる点もあるが、ひとつ気になるのは作者の、ホームのお年寄りたちを見るときその視線である。その人たちを見下ろしていると感じる場面があるのである。特に園内の男女の關係について触れた箇所では、その人たちの様子を揶揄するように描写しており、品格に欠けるように感じられ読んで後味が悪い。

紀行文で印象深いのは、詩人のペンになるものだろうか。「ばくらはオールド・デリーの繁華街を、群集にもまれながら歩いて行く。インドの浅草。映画の原色の看板はいたるところに。車―自動車、自転車、三輪車、荷馬車、牛車、人、コブ牛、犬、羊、あらゆるものが等価である。軒をつらねた小さな店屋に積まれたインドの産物、二百種類の香辛料、宗教用の顔料、線香、ジャスミン、インドのはそい安葉巻ビデイ、豆、野菜、マンゴー、カレー粉、人と動物のあらゆる分泌物と排泄物、赤い砂ほこり、鳥の糞、匂いもまた、ここでは等価であつて、聖なる匂いからワイセツな匂いにもいたるまで、鼻孔を貫き、魂を混迷に落としいれ、はては甘美と嫌悪と郷愁と睡眠と覚醒といった反対感情、対極感情の同時併存する交響楽と化するのだ。インドの匂い」。―田村隆一氏の「インド酔夢行」は、まさに詩人の視覚と嗅覚が全開した言葉の魔術に圧倒される。

元本学教授で詩人、批評家でもあつた杉本春生氏の「愛と死への旅」は、わが国の古典や近代文学の中で海、島、岬などがどう表現されているかを現地を訪ねて綴つたものだが、その描写も鮮烈である。「奇岩がつらなり、灰色の波がその岩肌を激しく嘔んでいる積丹岬の突端に立つと、人間は、任意の一点でしかなくなる。果てしない鉛色の空、荒々しい筋肉の動きをみせる波の隆起、空間はこんなに広いのに、人間の居場所がない、そんな感じに襲われる」。

食べ物エッセイで陥りやすいのは、食べ物のうまさを執拗に表現しがちなことだが、そのような作品は読者の反発を買うだけで感動は与えない。森須滋郎「食べてびっくり」にはその嫌いがあり（全国のうまいもの屋情報としては優れているが）、その点丸谷才一「食通知ったかぶり」、山口瞳「行きつけの店」は、同じようにあちこちのうまいもの屋を紹介しながらも、その料理にまつわる古今東西のエピソードや、その店の経営者の人となり、またそこに集まるお客の人間模様を散りばめて読ませるのである。

エッセイ鑑賞②

ここでは作家以外の、評論家、学者、画家、実業家、登山家らの作品を取り上げる。

学者のエッセイ 「英国について」から「英国の落ち着きということ」
吉田健一 「イギリスはおいしい」から「塩はふるふる野菜は茹でる」
林望 新聞のエッセイから「生前追悼」一海知義 「二番が一番」から「定年後の自立へ」森毅
芸術家の名エッセイ 「中川一政文選」から「腹の虫」中川一政
経済人の作品 「死ぬための生き方」から「葬式に関する私の遺言」
元日経連会長 大槻文平

山に関する名エッセイ 「日本百名山」から「槍ヶ岳」深田久弥
ジャーナリストの作品 「新風土記」から「ニューグランド」酒井寛

英国に関するものではまず吉田健一氏の「英国の落ち着きということ」と。こんな話が出てくる。氏が英国を訪れ、シエークスピアの「ハムレット」を見にいったときのこと、帰りの汽車の都合で途中で劇場を出た。すると一緒にいた案内役の英国人が「あの芝居の先はどうなるんで

しょうか？」と氏に聞いたのである。そこで思うのだ。「これが英国と英国人の落ち着きなのだ」と。その理由を氏独特の粘着質の文体（これが魅力でもある）で説明するのだが長くなるので要約すると、英国人にしてみればシエークスピアが英国の劇作家だからといってその作品を知っていなくてはならないということはない。何なにかは知っておかなければということが日本にはあるが、本当は何も知らないのだから、ただ気忙しく思っているだけだ。そうであれば英国人が日本人の研究者に自国の作家のことを聞いても少しもおかしくない、というわけだ。「イギリス人と社会の奥深さをこれほど豊かな理解力で論じたエッセイは少ない」との評価も素直にうなずける、一文である。

林望氏の「イギリスはおいしい」は、「このイギリス帰りの先生は実に面白い随筆を書く。おかしくて中身がある。芸があつて品がいい」と丸谷才一氏に高く評価された。

異色なのは、中国文学者、一海知義氏の「生前追悼」。神戸新聞夕刊に載った短文だが大変面白い。何より題材が意表をつく。追悼文集といえは当然本人の死後にでる。本人は読めない。一番読みたいのは本人ではないか。ならば、生前に出そうと、この先生、実行する。そして文集には六十編近い「弔辞」が集まり、また自分も一文（自祭文）を書く羽目になるのである。世の中には面白い人がいるものだ。題材の奇抜さで成功したエッセイである。

数学者、森毅氏も人気が高い。「二番が一番」は何も甚の話ではなく、無論数学の話でもなく、「二番が一番」とは、我々はこの激しい競争社会の中でとにかく勝たねば、一番にならねばとあくせくしているが、そんなことにはとらわれずに生きようよ、むしろ「二番手が最高」と世相に一矢をむくいる。

「教わった技術が役に立つのは大衆芸術であつて、これは最小の努力で最小の効果を挙げる手である。自分の技術は最大な努力をしなければ

ならぬ。いかにゴツホの技術でもセザンヌの技術でも自分の役には立たない。自分の発想には自分の新しい技術がある。(略)牛や馬や鶏は人に飼われている。それは自分で餌食を探さない。与えられて満足している。猛獣はそうではない。どうしても満足できず、自分で原野にさまよい出て、戦って餌食を得る。終始危険に身をさらしている。独学の精神とはそういうものである。そうしなければおさまらぬ腹の虫をもっているのが芸術家と思う(腹の虫)。一奔放で生命感あふれる色彩と筆触で油絵ファンを引きつけた中川一政氏の芸術家観がよく伝わる一節である。

新聞記者、酒井寛氏の「ニューグランド」は以前朝日新聞に連載された新風土記シリーズの中の一編である。このシリーズは、全国四十七都道府県をそれぞれひとつのテーマに絞って取材しその地の風土や人々の氣質を描くという紀行ルポである。担当したのは名作家といわれるスター記者ばかりであったが「ニューグランド」は抜きん出てすばらしいものであった。ニューグランドとは今も横浜市にある日本のホテル史に残るホテルで終戦直後、マッカーサー占領軍に接収された。そのことを冒頭においてこのホテルの歴史がエピソード豊かにつづられる。大げさな形容詞や気負った表現はまったくない。彫琢を極めた静謐な文体がじょうじょうとした余韻をのこす。新聞記者らしくない文体が魅力だ。

エッセイを書く

実際にエッセイを書くとなると、まずはテーマの設定である。何をテーマに書くかは、その作品の内容を決定するのだからきわめて重要なことである。エッセイは他人に読んでもらうことを前提にしているわけだから、読者が興味や関心を持ちそうなテーマ選びは大切なことだ。そしてもっと大切なのは、自分自身がそのテーマにどうかかかわっているかであ

る。別の言い方をすれば、「鑑賞」のところでも触れたように、そのテーマに自分としては強い執着がある、このテーマはどうしても書きたいという、気持ちの盛り上がりが必要であろう。そのあたりの心得については里見敦は「文章の話」の中で「書きたいことが、胸いっぱいいたまってくるまで、筆をとらない」「心にもないことをいわない、本当に腹から出てくる以外のことは出さない」「文章には自分の魂があらわれなければならぬ」とのべている。

テーマ探すと表裏一体なのが素材集め。テーマが決まって素材を集める、またいろいろ素材を集めているうちにテーマが定まった、ということもあるだろう。普段からそのどちらにも嗅覚を働かせたい。毎日の単調な通勤電車の中の光景でさえ、その気になってみれば、ハッとする出来事、面白い発見があるのである。

よい文章を書くにはどうすればよいか。「優れたエッセイの要件」で登場した開高健氏の話が続けよう。「テリとツヤを出すには文章以外、つまり書くこと以外の修業を重ねるといかん。いい映画をみることに、いい音楽を聴くこと、いい絵を見ること、日本中はむろんのこと、世界中をほつつきあるくこと、思い切り辛い思いや悲しみを感じたり、腹の底から怒ったり、喜んだり、喜怒哀楽を味わいつくすこと。気障な言いかたやが、ようは人間を磨くことやなあ。それしかない」。私たちと同時代を生きた作家のアドバイスは説得力ある。

これからエッセイを書くこう、もつと腕を上げたいと思っておられる方々に最後に申し上げたいと思う。それは、とにかく沢山書く、たゆまず書き続ける、そして雑誌、新聞などのいろいろな読者投稿欄に積極的に挑戦されることだと思う。